

女子学生における喫煙行動と食生活に関する研究  
実践女大家政 ○関 登美子 速水 決

目的 喫煙の弊害について世論が高まりつつある。将来、母親となるべき女子学生の意識およびその行動について実態を調査し、今後の健康教育の一助としたい。

方法 昭和57年10月から12月にかけて、実践女子短期大学および実践女子大学において調査を行った。対象者は1439名であり、無記名質問紙法によった。調査内容は、喫煙状況、生活状況（ひとり暮らしか同居か、また食事作りは誰が担当しているのか）、食事の平均時間、食品の摂取状況、食物嗜好等についてである。

結果 1439名の女子学生のうち、喫煙者は14.3%、非喫煙者は85.7%であった。喫煙者の生活状況をひとり暮らしと同居とに分け比較してみると、ひとり暮らしの割合が10%高いという結果であった。料理作りについては、ひとり暮らしでは「毎日作る」が半数以上を示していた。食品の摂取状況について、ひとり暮らしの者に「パン型」が多く、同居している者に「ごはん型」が多くみられた。味の好みについては、喫煙者は「苦い味」を好み、非喫煙者では「甘い味」を好む傾向にあった。コーヒー、酒類、香辛料の嗜好についても、非喫煙者に比べ喫煙者の方が好む割合が高かった。